

日本文芸学会創立六〇周年記念第五九回全国大会次第

第一日 二〇二三年六月二三日(金) 午後二時四〇分時開始(大会受付 午後二時) 八号館グリーンホール

会場校挨拶(午後二時四〇分～五〇分)

フェリス女学院大学学長

荒井 真

開会の辞(午後二時五〇分～三時)

日本文芸学会代表理事

山口直孝

特集「二二世紀と夏目漱石」第一部

基調講演(午後三時～四時三〇分)

二一世紀に読み直す漱石文学

——資本主義・国家・戦争——

東京大学名誉教授・和光学園理事長

小森陽一

※基調講演は、フェリス女学院大学国文学会の協賛行事となります。

※開会に先立ち、理事会を開催します(午後一時～二時、八号館大会議室)

第二日 二〇二三年六月二四日(土) 午前一〇時開始(大会受付 午前九時三〇分) 八号館

研究発表(午前二〇時～午後〇時一〇分) 第一会場 八号館八二〇七教室

三島由紀夫『獅子』論

——繁子の生命意志と悲劇精神——

西安交通大学大学院

胡 莉蓉

大江健三郎『飼育』論

——人間の動物化と身体的な傷——

西安交通大学大学院

白 麗雲

大江健三郎『みずから我が涙をぬぐいたまう日』論

——「天皇制」からの脱却と「母性原理」への転換——

西安交通大学外国語学院

陳 汝倩

特集「二二世紀と夏目漱石」第二部

研究発表(午前一〇時～午後〇時一〇分) 第二会場 八号館八二〇六教室

夏目漱石『文鳥』の女性観

西安交通大学大学院

郭 咪咪

中国における夏目漱石『満韓とところどころ』の受容研究

——時空を超えた「見る」と「見られる」——

西安交通大学大学院

張 倩

谷崎潤一郎「羹」における反漱石の志向

——「悪魔」「悪魔(続編)」を補助線として——

愛知県立津島東高等学校教諭

福田博則

総会(午後一時二〇分～午後二時) 八号館グリーンホール

特集「二二世紀と夏目漱石」第三部 八号館グリーンホール

シンポジウム(午後二時一〇分～午後五時三〇分)

夏目漱石と「左国史漢」

久留米大学

藤本晃嗣

「坊っちゃん」論考

——中学校と師範学校、帝国大学と高等師範学校の関係に着目して——

常磐会学園大学

宮 蘭美佳

漱石後期作品から探る現代への示唆

司会、デイスカッサント・フェリス女学院大学

九州ルーテル学院大学

金 戸清高

閉会の辞

日本文芸学会常任理事

外 村 彰

第三日 二〇二三年六月二五日(日)

神奈川文学踏査(事務局で資料を用意しますので、各自でご踏査ください)

日本文芸学会創立六〇周年記念第五九回全国大会 講演・研究発表要旨
特集「二一世紀と夏目漱石」

夏目漱石は、日本近代文芸において大きな足跡を残した作家であり、多くの読者に支持されて今日に至っています。漢文学、ヨーロッパ文学に親しみ、「文学」の普遍性を模索しながら書き継がれた創作は、二律背反的な状況に置かれた個人の葛藤をとらえたものでした。一世紀以上を経た現在も、共感を寄せる読者は少なくありません。

技術の進歩により、生活水準は上がり、物質的な豊かさを人々は手に入れました。一方で階級格差が広がり、国家民族間の対立が深まる事態にも、私たちは直面しています。資本主義の拡大再生産の論理は、人が自足することを許さず、不断の移動とさらなる労働とを求め、また対立を生み出す要因ともなっています。漱石が今なお読まれる理由は、作家の生きた時代と現代との同質性に求められるかもしれませぬ。本特集「二一世紀と夏目漱石」は、今日的状況から漱石の仕事をとらえ直す試みです。近世から近代の時代を生き、ヨーロッパ留学や中国朝鮮旅行を通じて異文化に触れた漱石が何をどうとらえ、表現したか、改めて検証します。価値観の急激な変容の中で個人が孤立を余儀なくされる事態に直面した書き手の模索をたどり、創作の源泉やモチーフに迫ることを通じて、現在を対象化する手がかりを得たいと考えます。

《六月二三日（金）》

基調講演（特集「二一世紀と夏目漱石」第一部）

二一世紀に読み直す漱石文学 — 資本主義・国家・戦争 —

東京大学名誉教授・和光学園理事長 小森 陽一

漱石夏目金之助が生まれたのは一八六七年一月五日。翌年塩原昌之助の養子となる。幕府軍と討幕派との内戦としての戊辰戦争の只中であった。養父母の不仲で夏目家に帰るのが一八七六年。この年の一〇月末に熊本で神風連の乱、福岡で秋月の乱、山口では萩の乱が発生し、翌年一月には西南戦争と、士族反乱が連続する。新しい国家の在り方をめぐる旧支配階級の内戦の時代であった。

大学予備門から帝国大学文科大学に進学して、正岡子規との文学的友情を深め一八九三年卒業する。翌年五月の朝鮮における甲午農民戦争への日本軍の出兵を契機として、八月に日清戦争開戦、学生は徴兵対象ではなかったが、卒業すると徴兵される。この時は徴兵制の対象地域に唯一なっていなかった北海道に、戸籍を移すことになる。岩内町役場には、今でも「夏目漱石本籍地」の石碑がある。

日清戦争に勝利した大日本帝国は、清国から莫大な戦争賠償金を獲得し、「三国干渉」の中心となったロシアに対する戦争準備のため、軍需産業を中心とした資金投入が国家によって推進されていった。『こゝろ』の「先生」が上京するのはこの頃であり、「利子の半分」で生活が出来たのは、日清戦後好景気のためであった。夏目金之助が一九〇〇年九月に文部省第一回官費留学生としてロンドンに留学出来たのも、戦争賠償金が文教予算にまでまわって来たからである。

帰国後第一高等学校兼東京帝国大学講師となり、日露戦争二年目の一九〇五年一月、俳句雑誌「ホトトギス」に『吾輩は猫である』を発表する。一月一日旅順戦でステッセルが降伏した。『猫』の第二回には「旅順が落ちたので市中は大変な景気ですよ」と寒月君は苦沙弥先生を祝勝会に誘っている。

『三四郎』冒頭の汽車の中の場面には、日露戦争で息子を喪った父親が登場する。金之助のかつての勤務先だった第五高等学校の学生だった三四郎は徴兵をまぬかれている。『それから』の長井得は、日清日露の二つの戦争で財産を築いた資本家として設定されている。御米との恋愛事件で、京都帝国大学を退学した『門』の主人公宗助は、日露戦争の軍事拠点であった広島で結婚生活を始めている。前期三部作の背後では、戦争資本主義がうごめいている。

『彼岸過迄』では、軍の「主計官」と結びついた資本家一家が中心となるなど、漱石の作中人物たちの運命は、戦争を遂行する近代資本主義国家としての大日本帝国の、それぞれの時代の政治の在り方と不可分に結びつけられている。

《六月二十四日(土)》

研究発表 第一会場

三島由紀夫『獅子』論 ― 繁子の生命意志と悲劇精神 ―

西安交通大学大学院 胡 莉蓉

『獅子』（『序曲』一九四八年十二月）は、三島が戦後の時代に介入しようとした時期に、エウリピデスの悲劇作品「メーデア」を忠実に翻案しながら、「みごとに日本化」（『解説』『日本の文学』三島由紀夫一九六五年）した短編小説である。三島は、女主人公の「奇矯の論理は、後にいたって、『愛の渴き』の女主人公の論理にその自我の積極面を、戯曲『聖女』『夜の向日葵』の女主人公にその無垢にして絶対な運命への献身の面を、貸与してくれた」（『あとがき』『三島由紀夫作品集4』一九五三年）と自作解説した。さらに、これらの作品を「時代への抵抗の要素を取り去つて読めばわかりにくい部分がある（『あとがき』『三島由紀夫短編全集』一九七五）と述べた。では、現実において女性を軽視する三島は、これらの女主人公の（狂的）な行動を通じて、どのような「対社会」の意識を表現していたのか。『獅子』はこの問いに答える上で重要な視点を提供している。

鶴田欣也は、『獅子』において視覚化された「バラバラした」人物像に着目し、作品の古典的な形式を評価しつつ、繁子の復讐に実感が足りないと主張する。しかしやはり、戦後という時代に生きる主人公の不条理な復讐行為にこめられた時代への抵抗の意味を検討する必要がある。また、田中美代子は、繁子の英雄への意志が、「男性をも凌駕するおそるべき女性の情念によって表出された点」に、時代精神が反映されていると鋭く指摘する一方、アイゲウスの助言を「キリストの福音」とする解釈を示すが、宗教の彼岸観念を拒絶した繁子の悲劇への欲望をさらに問題にしない。また、藤田佑は、内面描写に拒否された繁子が語り手に代弁されていたが、彼女の最後の肉声が語り手の記述を始めとする「他者のいかなる意味づけ」への裏切りだと力説する。だが、三人称小説の中に、登場人物の内面活動と語り手の代弁をどの程度区別できるかは疑わしいし、「内面を言語化できない」或いは内面がないことこそ、近代理性を相対化する繁子の存在する理由なのではないか。要するに、繁子は鶴田氏の主張される（一貫性）、田中氏の言われる（救済）、藤田氏の指摘される（内部）を逸する存在なのではないか。

周知のように、三島はニーチェを愛読していた。ニーチェは『ツァラトゥストラかく語りき』において精神が（駱駝）、（獅子）、（幼子）という三段の変化を経ると説く。三島は作品の題名を「獅子」にするのは、原作や繁子が「雌獅子」に呼ばれるシーンによると想定できるが、繁子の精神状態から見ればニーチェの精神説との関係も否めない。そこで、本稿はまず繁子が生きている戦後日本の無秩序、無倫理の社会現実を確認し、そして、ニーチェの精神説や強力意志論を使い、他の登場人物との対立において、繁子の愛や救済といった観念に抑圧される（駱駝）のような精神境遇を検討する。最後に、繁子の子殺し及び寿雄との対決を考察することによって、彼女が求める「高度の安寧秩序」は『愛の渴き』においての悦子が探している三郎「以上のもの」に通底し、それは日常の倫理秩序を超越するニーチェ式の生命倫理及びディオニソスの悲劇精神であると主張したい。それは三島の戦後時代へのアイロニー及び悲劇的な抵抗だとも言えよう。

大江健三郎短篇集『死者の奢り』（文藝春秋、一九五八年三月）に収められている七つの短篇は、どれも様々な動物が登場するだけでなく、人間の動物化や身体的な傷が意図的に描かれているのが極めて大きな特徴である。だが、その中で、特に「飼育」は、犬を殺す『奇妙な仕事』と、死体を描く『死者の奢り』とも異質な存在感を示している。即ち、作品の舞台が都会から谷間の村に移され、黒人兵を動物として飼育したり、書記の義肢や父の鉦に叩きつぶされた「僕」の手を描いたりすることによって、大江文学の「神話的かつ民話的な構造」（『大江健三郎・再発見』、二〇〇一年）が構築されている。作品の発表当時、江藤淳は「空から降りて来た黒人兵を牛のように飼い、彼との間に牧歌的な関係を結んでいた少年が、突然兵士の虜にされ、愛する《牛》を自分の手とともに父の鉦でたたきつぶされる話」で、「いわばこの作品のなかで「戦争」と主人公の内的成長がフーガを奏して、それが父の鉦の一閃で合致したということもできるだろう。」と絶賛しているのに対し、三島由紀夫は大江の初期作品にある動物の視点から、まったく新しい性格の批評Ⅱ「動物文学」（『私の遍歴時代』、一九八九年）を提示した。ところが、研究界においては、長い間『飼育』を「動物文学」として読む読み方が無視されてきた。湾岸戦争が勃発した際、小泉首相を中心とする日本政府とヨーロッパの幾つもの国がその戦争を支持した国際情勢を洞察し、大江は「私らの世界は、あらためて犬とオオカミの間の逆行の時にあ」る、と批判し、その上「小説は、犬がオオカミに返る時、人間も文化の積み重ねなどはむなく、逆行してオオカミにひとしくなる、それが戦争の時代の真実だと語るのです。」（『犬とオオカミの間』、二〇〇四）と発言した。この発言を切っ掛けに、村上克尚は『奇妙な仕事』を、「人間と動物のあいだに潜在する暴力的関係を露出させ」て、「応答責任のなかで、『人間』と『動物』の既成の境界線を問い直すような道が志向されねばならない」（二〇〇八）と読む。それに続いて、『飼育』に対する三島の、「黒人兵に向けられる『人間の奴隷化や殺力の欲望』や『エロティシズムの理論を導入することで、これをすぐさま美学的な次元に昇華してしまっ』たことを批判した上、『飼育』は「言葉を奪われ、殺害される《動物》としての黒人兵への倫理的応答を促し」、「《全き他者》の受容を問いかける物語」（二〇一〇）だ、という新たな読みを示す。これらの見解は大江文学の研究にとって大きな一歩となったに違いない。しかし、『飼育』だけではなく、大江の初期作品（主に短篇集『死者の奢り』）において、「人間の動物化」と、登場人物に動物の名前を付けるモチーフとの相関関係、人間の動物化と文明の逆行との関連を明かにしなければ、大江の言う「犬がオオカミに返る時」の真意は究明できないのではないか。従って、本発表は、黒人兵の動物化、身体的な傷、書記や黒人兵の死と「僕」の再生、という問題を切り口にして、人間と動物の境界線を曖昧にする「戦争の時代の真実」を検討していく。

大江健三郎『みずから我が涙をぬぐいたまう日』論

—「天皇制」からの脱却と「母性原理」への転換—

西安交通大学外国语学院 陳 汝倩

『みずから我が涙をぬぐいたまう日』（『群像』一九七一・一〇）は、大江健三郎が『セヴンティーン』（『文学界』一九六一・一）で「純粹天皇」の問題を提出して以来、一〇年ぶりに「天皇制」の問題を再追究した小説である。大江は「僕はまさに三島の自決の翌年に、それにこたえるようにして書いたのだ。自分にとって天皇制がどのようなものであったか、現にどうであるかを正直に書いて、三島事件における三島の天皇観・国家観は、本当にかれのそう信じるものであったかを問いたい、というのが動機だった。」（『少年の魂に刻印された……』）と告白しているが、二人の天皇観はどのように違っているのか。また、大江と三島は「政治的立場を異にしながらも、二人が煮詰めていった問題とは、天皇を支える心性のなかに見られる最終的な情念の形態とは何かという問題であり、その純化のプロセスにおいて両者はきわめて接近しているのである。大きなちがいはただ一点、大江が『美学』への志向を遠ざけていることである。」（小林敏明「想像される〈父〉とその想像的殺害」という見解もあるが、両者の「大きなちがいは『大江が『美学』への志向を遠ざけている』という論の帰結は妥当であろうか。篠原茂は『あの人』を仲介として天皇制をとらえようとする作者の意図が、三島由紀夫の自殺と無関係ではなく、『純粹天皇』という言葉に集中的に表現されている。」（『大江健三郎文学事典』）というのに対し、一條孝夫は「あの人」と「かれ」の狂気（天皇制への固執）は、いずれも日本人もこのことについて「態度が変わってくる」に違いないという、母の持続的な批判者の眼によって相対化されている。その際、作者は狂気の内側から描くことが狂者の独白に終始する危険をさけるため、表現の仕掛けを工夫している。「遺言代執行人」と呼ばれる妻の筆記と、『くみこまれる妻・「かれ」・母の言葉との二重構造がそれだが、内容的には地続きの記述であるため、意図通りに成功していない。」（『大江健三郎 その文学と背景』）と指摘する。ここで、篠原、一條はともに「あの人」に注目し、「天皇制」の問題を捉えようとしているが、「天皇制」の問題と「母性原理」との相関性に関しては、両者とも見逃している。即ち「妻の筆記と、『くみこまれる妻・「かれ」・母の言葉との二重構造』は「天皇制」から「母性原理」への転換を示唆していると考えられるのである。言い換えれば、「かれ」は母のことに「天皇制」による狂気状態から癒された。以上の問題を踏まえ、本論文はラカンの精神分析の原理を生かして、（１）語りの二重構造…精神分析家による狂者の精神分析治療（２）症状の形成…「あの人」と母親との同一化（３）症状の表象…時代のトラウマ（４）症状の解消…「天皇制」からの脱出と母の救済、以上の四つの視点から「天皇制」からの脱却と「母性原理」への転換を検討したい。

夏目漱石『文鳥』は「大阪朝日新聞」（一九〇八）に掲載され、同年一〇月「ホトトギス」に転載された短編小説である。「僕」は知人の三重吉の勧めで、真つ白で綺麗な文鳥を飼い始めたが、世話を怠ったので文鳥を死なせてしまった。夏目漱石は『文鳥』に写生的な手法で大人しくて可愛く、「何だか淡雪の精のような」（漱石全集）第一二巻、一九九四）生きている文鳥の姿と死んだ後の可哀想な文鳥の姿を細かく描写しているが、叙情的でロマン的な想像とうまく合わせて自らの繊細な愛憎感情も見事に表している。先行研究では、「文鳥」と女の関連性に関して様々に論じられているが¹⁾、「文鳥」を通して表されている漱石の女性観はあまり注目されなかった。小森陽一はフェミニズム批評の視点から夏目漱石の一系列の作品を対象として、漱石の女性観を考察した²⁾が、そこでも『文鳥』は見逃されている。長編の合間に挟まれた短編だけではなく、『文鳥』に登場した女性に関する描写は少なく、完全な女性像を把握しにくいのが、主な原因だと考えられる。しかし、作品で、女性を文鳥に喩えて、その悲しい一生を描いているのは何故なのか。『文鳥』における女性像を通して、漱石の女性観を見ていきたい。

人気の舶来の鳥類に比べたら、文鳥は生粋のアジアの鳥で、珍しい品種でもない。漱石は女性を生粋の文鳥に喩えるのは、伝統的なアジア女性、更に日本伝統女性を指しているのではないか。本文によると、文鳥は目も羽も「綺麗」で、美しい姿である。「僕」のうっかりで何回も「餌壺が粟の殻だけになっていった」「籠の底が糞でいっぱいになっていった」「狭い空間」に対しても、「僕」の無関心に対しても、文鳥は「いつこう不平らしい顔もしなかった」「その様子がなかなか無邪気である」。そして、「僕」は餌壺を籠に入れる時、文鳥を飛び出させないように「左の手で開いた口をすぐ塞いだ」が、文鳥は「人の隙を窺って逃げるような鳥とも見えない」。三重吉は文鳥が馴れると千代と鳴くと言ったが、ただ二日間だけで、文鳥は「たちまち千代千代と二声鳴いた」。そういう描写を通して、文鳥が比喩した女性のやさしさ、無邪気と忠実を描いている。漱石の肯定的な女性観が見られるのであろう。しかし一方で、自由を奪われた文鳥がやさしすぎて、劣悪な環境や理不尽な待遇など困難な現実を前にして、気が弱くて、自立性もない否定的な女性観も見られるのであろう。「僕」が文鳥の世話を疎かにしたために文鳥が死んだことが、自立しない女性の他者依存の問題も示しているのである。それは漱石が新旧時代交錯時の伝統女性の文鳥のような保守的、弱気である面を明らかに否定し、新時代女性は自己意識が覚めて、西洋女性のように自立して大胆に自由を求めるべきことを勧めているのであろう。

明治維新の後、一八八六年日本全国で女学校がたくさんでき、一夫一妻制が要求され、娼妓運動も激しく行われた。色々な女性運動は旧時代の女性たちを女性蔑視や封建束縛の状況から変えようとして、男女平等、女性自立の社会風潮を建設しようとしていた。東西の文化が衝突した明治時代の日本に生きた漱石は知識人として、この時代の女性はどう生きるべきか、どのような人生態度を取るべきか、「文鳥」を通して表していた。本研究では、テキスト分析方法で、社会の歴史事実と漱石の個人履歴を合わせて、漱石の伝統的な日本風の綺麗がある一方で、独立な個性があり、勇敢に自由を求める現代的、西洋的な女性観を検討したい。

注1) 内田道雄「漱石の作品——『四篇』を中心に——」（『古典と近代文学』一九七七）、亀井雅司「『文鳥』の時間」（『叙説』一九八二）、西横俣「響き合うテキスト 豊子愷と漱石、ハーン」（『日本研究・国際日本文化研究センター紀要』二〇〇六）、島本彩「『章程』の小さな〈記憶〉の物語——夏目漱石『文鳥』論」（『日本文学』二〇一三）等。

2) 小森陽一「漱石の女性像」（『岩波書店』一九九四）

中国における夏目漱石『滿韓ところどころ』の受容研究

—時空を超えた「見る」と「見られる」—

西安交通大学大学院 張 倩

『滿韓ところどころ』は夏目漱石が一九〇九年に、旧満洲を旅したことを書いた紀行文である。中国語に翻訳されてから、今でも中国の読者に読まれている。このプロセスに、二回の異文化間の「見る」と「見られる」——日本作家である漱石が清末を「見る」ことと、中国の読者が漱石の描いた清末とその「見」を見ること——を含んでいるため、『滿韓ところどころ』の中国での受容は、異文化の理解に関わる特殊な事例である。先行研究は、作品あるいは漱石の異文化体験に焦点を当てたものが多く、読者の受容を無視している。本稿は異文化の理解を研究のパススペクティブにして、「豆瓣ネット」（中国で最も大きな書評ネット）において、『滿韓ところどころ』に関する読者のコメントを分析し、作品の受容状況を把握した上に、異文化に関わる文学作品を理解するには、異文化の理解が重要な意味を持つことを明らかにしたい。

「異文化の理解」というのは、複数の文化が共存する場合、「違ったものを認め」という、違いに敬意を払いつつ、その違いを共感する」（鈴木雅光「異文化の理解」、二〇〇五年）ことである。異文化に対する認識主体の姿勢は、異文化を理解できるかどうかを決定する。Jean Piaget は、人は自分の認知枠組みを逸するものや、内的期待と異なる考えに出会うと、自分の主張を固持する傾向があると指摘している（Jean Piaget: *Epistemological Studies in Genetic Psychology*, 1970）。即ち、読者の固有認識は、異文化の理解を邪魔する。そして、個人的記憶に比べ、集合的記憶は、文化コミュニケーションにおいてより重要な役割を果たす。それは、超時空的な特性を持ち、常に異なる時空中で活性化され、個人の認知に長期的に影響を与える。（アストリッド・エラル「集合的記憶と想起文化」二〇二二年）。したがって、本稿はアストリッド・エラルの記憶理論に基づき、読者のコメントに含まれる「見る」姿勢を考察し、集合的記憶と個人的記憶がどのように読者の異文化理解に影響するかを検討したい。

中国研究者の中に、「漱石が清末を見る」というのは、漱石が表の「不潔」と「混乱」だけを見、中国民衆の苦しみを引き起こした清朝政府の墮落を見ていなかったため、不完全な異文化体験だと主張する人がいる。しかし、中国の読者は「漱石の見ることを」と見ると、集合的記憶を活性化させられ、そのコメントに影響を与える。多くのコメントは、漱石の残酷さや無同情を批判するとともに、晩清に生きる民衆に対する同情や、清朝政府の無能への憎しみの気持ちを表している。現在の中国の衛生状況がまだ日本に及ばないと連想したのもあった。そこから、中国の読者は異なる時空——近代清末の歴史及び今までの中日関係をめぐる集合的記憶に影響されていることがわかった。これらの集合的記憶は民族意識や愛国心を催し、コメントを一致させるようにするが、個人生活から生まれた個人的記憶はコメントの視点を多様化させる。が、これらの記憶には否定的なものが多いため、中国の読者は文化的な違いに直面すると、否定的なコメントを多く出した。これは、読者が著者の複数の文化的なアイデンティティを通じて、テキストで表現された複雑な感情を理解することを妨げることになる。

文学の創作と読解には、作者と読者の主観性を避けられないため、異文化を完全に客観的に捉えることができない。本発表は、文化間の対話を主張する空間哲学を活用し、文化間の対話空間を拡大することで、読者が異文化を含む文学作品を読む際に、どのように異文化を理解できるかを明らかにしたい。

谷崎潤一郎の小説「羹」は、明治四十五年七月から大正元年の十一月にわたって『東京日日新聞』に掲載された。それまで短編を中心に執筆をしてきた谷崎にとって、初の長編小説であった。

谷崎は「羹」連載開始直前の明治四十五年二月に、『中央公論』に小説「悪魔」を掲載し、物議をかもしている。明治四十五年七月八日の『東京日日新聞』では「羹」前書き」として「◎「悪魔」を書いたら、穢いと云って攻撃された。耽美派の一人なるが故に、きれいな小説を書かねばならないのなら、私は「耽美派」と云ふ称呼を呪ひたく思ふ。◎「羹」と去ふ字は耽美派の美の字に恰好が似て居る。けれどもそんなきれいな小記を書くつもりではない。」と、「羹」連載に当たった際の決意を述べている。しかしこの意気込みとは裏腹に、「羹」は新聞連載の間には完結せず、大正元年十一月十九日で一度終わった。ここで谷崎は「此処で一と区り付けたのに過ぎない。いづれ来年の春頃から再び稿を継ぐ事にする。」「後書」で述べ、「羹」完結への意欲を見せている。しかし実際は大正七年の春陽堂版の単行本で、二章が書き足されたのみで完結してしまった。

谷崎の文学的出発は、夏目漱石への対抗であった。第二次『新思潮』の創刊号に「門」を評すという論文を掲載し、漱石の作品を「拵えもの」と断じている。その後も漱石没後の大正九年には「芸術家一家言」において「明暗」を激しく批判し、「その組み立てがうその組み立てであつて、其処にはたゞ作者の巧慧なる理智の働きがあるのみである。」と断じている。こういった谷崎にとって、「羹」は、自身の作家的立場、反漱石の立場を明確にするものではなく、その嚆矢となるべき作品でもあったはずである。しかし実際は、新聞連載の後に短い章が付記されただけで終わってしまった。この理由を、「悪魔」連載終了直後に書かれた小説「悪魔（続編）」に見ることができると考えられる。話題を呼んだ「悪魔」だが、実は続きと目される「悪魔（続編）」によって、その作品上の位置づけが大きく変更されていることは意外と知られていない。話題になった、女の鼻水を舐める部分は「羹」の直後に執筆された「悪魔（続編）」によって否定される。そして、「悪魔」及び「悪魔（続編）」は、「……女と云ふ奴は、みんなかう云ふ風にして、男を片つ端から腐らせるんだ。」（「悪魔（続編）」という佐伯の台詞に集約されるように、「墮落」を描いた作品として中途から変更させられている。これが谷崎が実は「羹」で当初書こうとしていたものと考えられ、この「墮落」を描くことを通じて谷崎は漱石に対抗するという自身の方向性を実践しようとしていたと考えられる。本論は谷崎のこの方向性について再確認するとともに、夏目漱石に対抗しようとした谷崎の文学的立場を明らかにし、「羹」という作品に一定の評価を与えてみたいと考える。

シンポジウム(特集)「二一世紀と夏目漱石」第三部

夏目漱石と「左国史漢」

久留米大学 藤本 晃嗣

夏目漱石は、自らを「中途半端の教育を受けた海陸両棲動物のやうな怪しげなもの」(「文芸と道徳」)と述べているように、幼少期に漢籍を好んで読み、漢学塾へも通った一方で、大学で英文学を専攻しイギリスに留学しており、漢学と英文学の両方を学び、両者に精通していたとされる。このような教養のあり方は漱石の文学観の基盤を形成するものであり、このことは『文学論』の序文における「漢学に所謂文学」と「英語に所謂文学」との差異という問題として表れている。そして前者の代表として提示されているのが、「文学は斯くの如き者なりとの定義を漠然と冥々裏に左国史漢より得たり」とあるように「左国史漢」なのである。

「左国史漢」とは、「春秋左氏伝」「国語」「史記」「漢書」という古代中国の四つの歴史書をまとめた呼称であり、時に広く中国の古典籍を指す言葉として使われることもある。「左国史漢」に代表される漢学に基づく知が漱石文学において果たした役割については、英文学をはじめとした西洋的な知との研究の厚みに比べて乏しく、特に漱石の文学観や文学理論においてはその傾向は顕著である。『文学論』など漱石の文学理論に関わる著作で分析の材料とされるもの多くは西洋文学の作品であり、また参考にされた理論も西洋由来のものであることから、これまでの漱石の文学観の研究は西洋文学・思想の影響を考察することが中心であった。漢学については英語にもとづく「Literature」という「文学」概念を相対化するために「漢学に所謂文学」があったことが言及されるにとどまり、「左国史漢」やそれによって形成されたとされる「文学は斯くの如き者なりとの定義」が果たした意義について語られることは少なかつたと言える。

そもそも「文学」という言葉は、例えば福沢諭吉『学問のすゝめ』「初編」での「学問とは、唯むづかしき字を知り、解し難き古文を読み、和歌を楽み、詩を作るなど、世上に実のなき文学を云ふにあらず」などに見られるように、学問を広く覆う概念でもあった。『文学論』における「左国史漢」を代表とした「漢学に所謂文学」について、「漢学」における「文学」とは、物語でも、詩でも、小説でもなく儒学を中心とした政治と道徳をめぐる思想表現であった(小森陽一『漱石を読みなおす』)と指摘される通り、英文学とは全く異質なものとして「漢学」における「文学」が意識されていた。『文学論』が、「根本的に文学とは如何なるものぞと云ふ問題を解釈せん」とある通り、普遍的な文学理論構築を目指したものであるならば、このような「政治と道徳をめぐる思想表現」としての「文学」も射程に入っていたはずである。このことは、「余は社会的に文学は如何なる必要があつて存在し、興隆し、衰滅するかを究めんと誓へり」とあることからもうかがえる。本報告では、漱石の文学観において「左国史漢」に代表される漢学が果たした意義について考察する。

夏目漱石「坊っちゃん」は明治三十九年四月「ホトトギス」に掲載され、明治四〇年一月『鶉籠』（春陽堂）に収められた作品で、「四国辺のある中学校」が舞台となっている。

作品発表当時は、寺崎昌男が「一九〇〇年前後という時期が、尋常中学校が大学までの進学系統におけるアーティキュレーション機能を果たし始めた時期であること、大学では一八九三年に発足した講座制による専門分化と研究重視の体制が完成したこと、そして官・野で学制改革論議が沸騰した時期であることは、決して偶然ではない、前二者は尋常中学校教育の「アカデミズム」を支える制度的基盤を提供した。後者は帝国大学人たちの活動の舞台を提供した。」（三 旧制高等教育研究の視座）『近代日本における知の配分と国民統合』寺崎昌男編集委員会 平成5年6月 第一法規出版）と指摘するように、大学進学に向けた準備機関として位置づけられつつあった時期である。

一方師範学校は「一説に、師範学校は学問と教育の橋渡しをしたという論もあるが、もともと森にあつては、学問は帝国大学の特権であつて、中等教育機関に属する師範学校は、教育の場にすぎなかつた。なおかつ師範学校は中学校と比較してみても、小学校教育のありようによつて、その教育内容が決定され、かつその教科の教授の技術・方法を習得させる、小学校教育に即した目的機関であつた。」（花井信「四国民教育制度と師範教育」前掲『近代日本における知の配分と国民統合』）と、中学校と同様中等教育機関であつても、帝国大学を頂点とする学問への接続を目的とせず、教育内容は小学校教育に依拠するといつた性格の異なるものであつた。

加えて中学校教員養成においても、帝国大学と高等師範の流れがあり、どちらが本流であるかはしばしば教育界の話題となつていた（三好信浩『日本師範教育史の構造―地域実態史からの解析』平成三年二月 東洋館出版社）ように両者のせめぎ合いが見られた。

「坊っちゃん」には「中学と師範とはどこの県下でも犬と猿の様に仲がわるいさうだ。」と述べられ、実際に中学の生徒と師範学校の生徒の喧嘩が描かれている。また教師間の關係に着目すると、大学出身の赤シャツが非大学出身のうらなりの間でマドンナを巡るせめぎ合いが描かれ、非大学出身のうらなりはマドンナとの結婚が叶わず、失意のうちに延岡への転任を余儀なくされる結果となる。非大学出身者が大学出身者に抵抗するすべを持たず駆逐される結末とも言えよう。

本発表では、中学校と師範学校、帝国大学と高等師範学校の關係に着目し、「坊っちゃん」を本来師範学校が優位性を發揮できるはずの教育の場でも卓越した優位性を示し得ない、声にならないいらだちと諦観が描かれた作品として位置づける可能性を探ることとする。

漱石後期作品から探る現代への示唆

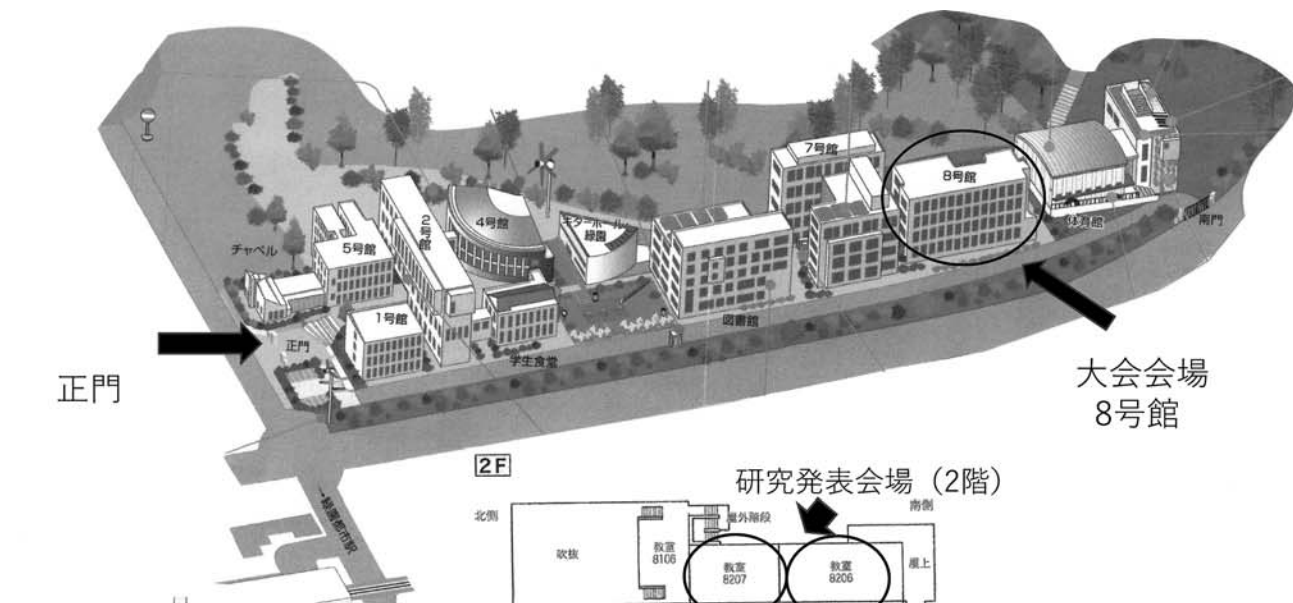
九州ルーテル学院大学 金戸 清高

ケインズは世界恐慌のさなかであった一九三〇年に一〇〇年後の世界は生活水準が四〜八倍になり、一日に三時間も働けば生活に必要なものを手にすることができるようにすると予言した。現在の状況をみると、例えばアメリカのGDPは確かに一九三〇年の六倍以上になった。にもかかわらず先進国の労働時間は増え続けている。我々は未だ「豊かな生活」を実感できないでいる。また産業革命時の人口爆発以来増え続けた世界人口も二二世紀には一一〇億人で頭打ちになるという(国連人口推計二〇一九)。つまり大量生産・大量消費という経済成長が望めなくなってきたのである。「成長の臨界」を指摘した河野龍太郎氏は、現代は「豊かだが貧しい社会」であり、今こそ「足るを知る」ことが必要だと警鐘を鳴らす。我々は寧ろ物質ではなく(心の豊かさ)を必要としているのではないだろうか。

このような時代に、多様化、ジェンダー問題、環境問題等現代の批評に堪えない部分があるかもしれないが、二〇世紀を生き、時代を見つめながら思索し書き続けた漱石文学に立ち返ることはそれでも意義あることと考える。〈富国強兵〉〈領土拡大〉の時代に「気をつけな」とあぶない、「(日本は)滅びるね」(三四郎 一)と指摘し、「進んで止まる事を知らない科学は、かつて我々に止まる事を許してくれた事がない」(行人)「塵勞」三十二)という。そして現代は、シンギュラリティ(技術的特異点)がとりざたされる中、生成型AIの進歩が現代文化にどのような影響を及ぼすかが懸念されている。

「二二世紀」とは大きな括りではあるが、漱石が五〇年の生涯を生きた時代(一八六七〜一九一六)と現代を起点とした前後五〇年(一九七三〜二〇二三、そして二〇二三〜二〇七三)を照らし合わせると不思議な符牒が窺える。たとえば日本の総人口は漱石が生きた時代に三〇〇万人から五〇〇〇万人に増えたが、現代は二〇〇四年にピークを迎え減少社会に移行した。総務省の推計によれば二一〇〇年(二二世紀)には明治期後半のレベルになるという。一方平均寿命は明治期の倍になったのだが、労働人口、消費人口ともに減少した時代にはこれまでの資本主義の枠組みでは進展できない状況にある。漱石は大英帝国の繁栄を目のあたりにし、日本の近代文明の皮相性に警鐘を鳴らした。また、漱石は植民地時代を生きた人間であったが、世界的にもグローバル化の終焉が指摘される今日の状況は、日本もまた例外ではない。現代日本は周辺途上国から「大東亜共栄圏構想」の精神を実質何も手放さず継承しているという指摘を受けている。現代日本は海外の労働力と資源を前提として先進国たりえているのだが、それは国内においても同様、格差を助長する社会構造によって成り立っているのである。

漱石の主題を一言でいうなら〈存在の意味の探求〉にあるだろう。それは「父母未生以前」あるいは「命根」と表現されるが、「自分と云うものは必竟何物」(門 十八)なのか、「御前は必竟何をしに世の中に生れて来たのだ」(道草 九十七)と繰り返し問われる。そして我々はどこに向かうのだろうか、今回の発題は「彼岸過迄」を起点とした漱石の後期作品を再検証することによって、どのような未来への示唆を受けることができるかを探りたい。

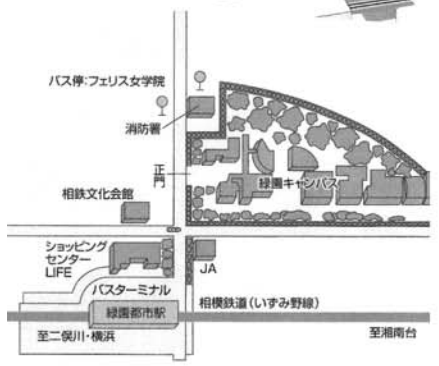


フェリス女学院大学 緑園キャンパス

日本文芸学会創立60周年記念
第59回全国大会会場

正門

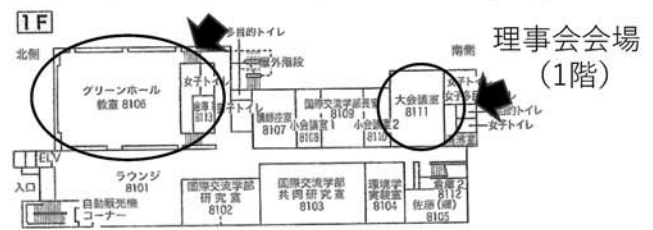
大会会場
8号館



2F 研究発表会場 (2階)



1F 基調講演、シンポジウム、総会会場 (1階)



交通アクセス

- 相鉄いずみ野線「緑園都市駅」下車徒歩3分
(横浜→緑園都市 約17分)
- JR横須賀線「東戸塚駅」下車
神奈中バスにのりかえ「フェリス女学院」下車徒歩3分
(東戸塚→フェリス女学院 約15分)